地域リハビリテーションを考える

大阪府身体障害者更生相談所
所　長　　澤田　啓祐

Ⅱ．リハビリテーションで大切なこと

イ．障害者にとって大切なこと

障害を持った人々は、身体的な障害に注目するのがほとんどで、「どうしてこんな身体になったのか」、「どうして私だけがこんなに苦しむのか」、「何とか元の身体にならないだろうか」、「もし元の身体にならないとしても、今の障害がより軽くならないだろうか」と考え、希望しておられます。

障害を残すとわかった時、人は悲しみ、怒り、時には抑うつ状態になり、自分を否定することとなります。一生懸命訓練しても動かない手、満足にはできない歩行、仕事に復帰できそうもない自分、これからの家庭生活をどうしたらよいのだろう、一歩家から外に出ると、近所の人々の視線が気になり、どうしても屋外に出ることすらできなくなり、ますます自分の殻の内に入り込んでしまいます。

なかなか自分の障害を受け入れられないのです。障害を持って生きるなんて自分にはとうていできないと考えます。

こんな中にあって、「自分の障害を認め、障害を持って生活を作りだす」なんて一口に言いますが、決して、決して軽々しいことではありません。自分の障害を認め、明日に望みを見いだすのは想像を絶する大変な事柄なのです。この過程を障害の「受容」といいます。障害を受容することができると本人のリハビリテーションは急速に進みます。リハビリテーションの中でいちばん難しいのは心のリハビリテーションといっても過言ではありません。

障害者の家族も、また、社会の人々も、こんな障害を持った人々の心の動き、葛藤を十分に理解しておかなければなりません。特に、障害者の心を理解しない励ましやメニューの提供は、リハビリテーションの向上よりも阻害する要因になることを知っておかなければなりません。

養護学校に併設されている障害児のショートステイ（ロンドン）

ロ．社会にとって大切なこと

リハビリテーションに関する技術を開発していくこと、種々な機器を作りだすことも大切な事なのですが、それ以上に必要なのは、障害を持って生きる人々も今の私たちが住むこの社会の同じ構成員であり、同じ幸せを味わい、それぞれの市民が満足な、生き生きとした生活をおくる権利があることを確認することです。

障害者は社会の邪魔者、目ざわりな存在だと少しでも考える社会は弱い社会であり、リハビリテーションを阻害する社会です。

共に幸せな社会生活をするには、一人一人が同じ人間として生きるにはどうあるべきかを確認することです。大切なのは社会の、市民の心なのです。

それから障害者を現実の社会にいかにして適応させるかではなく、社会が障害者が住みなれた我が家で、地域社会で、安全で生き生きと生活できるように、又一般の健全な人々と同様にあらゆる社会活動に参加できる環境を、主人公である障害者が適応できるように作りだすことです。このことは障害を持つ人々も、持たない人々にとっても住みよい社会であるという合意を持つことが大切です。

ハ．リハビリテーションを進める人々にとって大切なこと

トータルな人間、社会の一員としての全人間的な再構築をめざすリハビリテーション活動は、各種の専門分野によって進められますが、あくまでも連携を条件とした専門分野であることを忘れてはなりません。

又、主人公は障害者であり、障害者の希望や、生き方を中心に進めることで、間違っても、助言、指導する側の満足であってはなりません。

ナーシングホーム（デンマーク）

ナーシングホーム内のテラス

障害児のショートステイ内の遊び場

デーサービスセンター内
の町並み風の通路

年金者集合住宅

Ⅲ．リハビリテーションにはゴールがある

障害を持っている限り、障害者はリハビリテーション、機能訓練を続けるのが当然のようにいう人がいます。「しっかり訓練を毎日しなさいよ、そうすれば良くなりますよ」「訓練を欠かすと悪くなりますよ」と励ます（？）つもりでしょうが、これは本当にそうなんでしょうか。障害を持った人は一生涯機能訓練をしなければならないのでしょうか。ゴールがないのでしょうか。

リハビリテーションにはゴールがあるのです。それはリハビリテーションに係る各種の専門家によって、身体的に、心理的に、合併症状や生活環境などのいろいろの要素によって評価され、達成可能なゴールが決められます。これらに向かって、今何をなすべきかのあり方が組み立てられ、進められるものです。

重い障害を持つ人は、その生活の全てを他人の介助を要しても、自分なりの満足できる生活、人生をどのようにすれば可能なのか、介護者の雇用や住む家の確保についての知恵を学習すること、また、車いすで自立した家庭生活を、一般社会の就労を、などのゴールが設定されます。

このゴールの設定やゴールに到達する方法については、本人への十分な説明と同意が不可欠です。そのうえでリハビリテーションの全てのコースが進められていき、十分にこのゴールに到達すれば、これを受け入れて（同意して）それなりの生活を維持することに心がけます。このことは一般の人々がそれぞれの職業に就き、また生活状態になって生活するのと何ら変わることがありません。

その後は健康に留意し、老化について十分に配慮します。ことに心理的に、身体的に、生活面にてもあらゆる面で省エネ化を心がけることが障害者にとって特に大切です。